



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

「教育お茶会」から「公共茶論」へ

著者	門田 志乃, 加藤 良太, 北村 英之
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	8
号	2
ページ	309-311
発行年	2006-12-22
権利	同志社大学大学院総合政策科学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011048

「教育お茶会」から「公共茶論」へ

門田 志乃・加藤 良太・北村 英之
 (博士前期課程) (博士後期課程) (博士前期課程)
 (2005年度生) (2005年度生) (2006年3月修了)

はじめに

昨年度(2005年度)教育政策に関心を持つ大学院総合政策科学研究科(以下、総政)の院生が中心となり、「教育お茶会」という自主研究会を行った。その活動を引き継ぎ、今年度からは「公共茶論」として新たなテーマで活動している。本報告では、「教育お茶会」の成立過程や研究内容、実績を紹介するとともに、「公共茶論」の今後の活動展開について紹介する。

2005年度の活動

昨年(2005年)4月、教育系の研究を行っている有志の学生により、「教育お茶会」が発足した。総合政策科学研究科には毎年、学校や社会教育といったいわゆる教育政策を研究テーマとする院生がいる。学校教員や社会教育の実践者をされている先輩も少なくない。一方で、教育政策を主とする教員や科目が当時はなく、院生同士の交流もほとんどみられなかった。そこで、同じ大学院で共通したテーマを持つ院生の知識と思考を幅広く集約し、かつ各自の研究を相互にサポートし合う研究会を組織しようと考えたのが、そもそものきっかけであった。発足当初中心となったのは、今里滋ゼミ、真山達志ゼミの2004年度、2005年度生。各自の関心は環境教育、鑑賞教育、開発教育、シティズンシップ・エデュケーション(以下、CE)など多岐にわたり、また、教員免許課程の履修者も多く、まさに「教育」を総合的に考えるのにふさわしいメンバーが集まった。

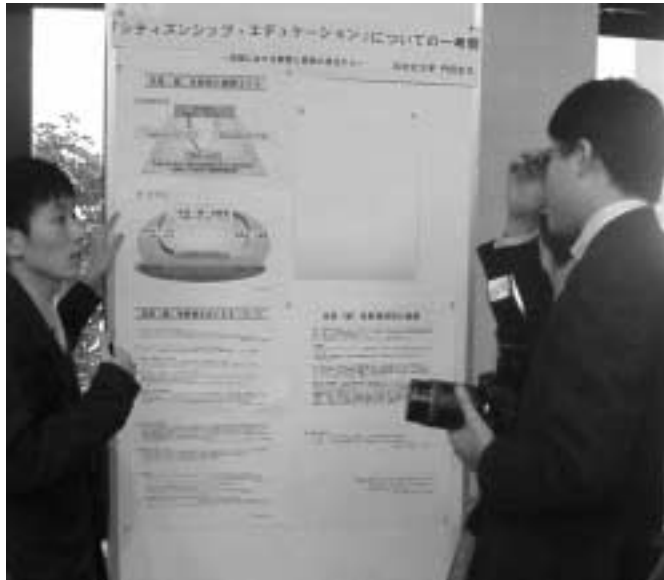
研究会が発足時こだわったことは、1.教育を

幅広くとらえること、2.教育「学」研究にはならないこと、3.記録を残すこと、の3点である。同志社大学には教育学を専門とする学科もある中で、あえて総政で教育を考えるのだから、まずは教育という言葉に対する先入観を捨てて総合性と一般性を重視しようと考えたのが前者2つである。また、研究会の成果(あるいは失敗)は研究会の外部とも共有すべきであるとして、ゼミブログやメーリングリストを通じた周知・報告を欠かさぬように心がけた。こうした点には、総政における教育政策に対する意識を喚起したいという思いも込められていた。

では、具体的な活動を紹介する。活動開始当初(2005年度春学期)は文献講読を中心に据えた。テキストを基にしたレジュメを作成し、それを基にしてみんなで議論を行う形式である。最初に取り組んだのはI.イリッチ『脱学校の社会』。「学校化」する社会に警鐘を鳴らし、学校教育をラディカルに批判する本書を最初に取り進めたことは、教育お茶会の「教育観」を方向付ける上で重要な位置を占めた。続いて教育学の古典、J.デューイ『学校と社会・子どもとカリキュラム』。読み進めていた当時は深く読み込めない部分も散見されたが、秋学期以降に民主主義と教育についての研究を進めた際には、振り返るべき示唆が多く含まれていた。

会は隔週ペースで開かれ、前半の講読の後には各自の関心に沿った小発表を続けた。こうして4月から11月にかけて、約10回の研究会が開かれ、和気藹々とした「学びの共同体」が形成されていった。

ところで、「教育お茶会」という会の名前は、大学院の研究会には少々似つかわしくないものと思われるかもしれない。しかし、私たちのアイデ



第1回政策系大学・大学院研究交流大会（2005年12月4日、京都）でのパネル発表

ンティティを強く定義付けている。ネーミングは発起人である北村によるが、強く意識したのはハーバース流の公共圏である。また、「お茶を飲みながら」快活な議論を展開し、「お茶を飲みながら」行き過ぎた専門化を自制する。そうした理想を象徴していた。この名前にひかれて参加し、会全体の発展に大きく貢献してくれた院生もいたことは、その方向性が正しかったことの証左といえるだろう。

さて、秋学期には、一つの具体的な目標が見出された。それが12月に開催された第1回政策系大学・大学院研究交流大会への参加である。10月、私たちはCEに関する研究をテーマに、パネル発表の部に参加することを決めた。このテーマが選ばれたのは、全国社会科教育学会がCEを2005年度全国大会（広島大学）で取り上げたことによる。学会では「市民科」などのCEを学校教育で導入する可能性について討議がなされたが、そこに参加した研究会メンバーの北村・門田は少なからぬ疑問を抱かずにはいられなかった。CEは学習者の意識と行動をアクチュアルな社会に差し向けるものである。なのに、教科教育としてのそれは、あくまで擬似社会としての学校教育の内部に留まろうとしているようにみえた。それはイリッチの言う学校化の解決にはならず、

教育お茶会が志向する「広義の教育」の発展とも相容れないと思われたのである。この点を批判的に追究すべく、研究発表を動機付けに集中的な考察を展開した。原稿執筆は議論と並行して進められ、パネル製作等の作業は連日深夜に及んだ。そうしたかけがえのない「共同研究」の時間をメンバーが共有し、問題意識を同じくする人々と出会い、ついには学術奨励賞（立命館大学賞）という栄誉まで受けられたことは、教育お茶会の最大の成果であった。

2005年度の「教育お茶会」の活動はその後、メンバーの修了や海外留学によりいったん収束に向かった。しかし、新たなメンバーも加わり、会のリソースは次年度へと受け継がれていくことになる。

今年度の活動

昨年度（2005年度）の研究関心がCE、あるいは公共圏における市民の「ふるまい」を方向付ける教育の機能にフォーカスしていく中で、昨年度の研究テーマであった教育への関心とは別に、市民的公共圏（性）のアクターである市民相互のコミュニケーションの問題、あるいは、市民的公

共圏そのものを形成するコミュニケーションへの関心が深まることになった。そこで、今年度(2006年度)の研究テーマを「公共圏とコミュニケーション」とし、研究会の名称も「公共茶論」と改め、今年度入学者も含めた新たなメンバーを迎えて、研究活動を進めることとなった。

研究会はこれまで7回ほど開催され、真山達志ゼミ、今里滋ゼミ、今川晃ゼミ、川井圭司ゼミなどから約10名程度の参加があった。メンバーの関心は昨年「教育」から比べると、市民社会論や地域政策に関心を持つ者が増えており、研究テーマそのものも含めて、より多くの総政の院生の関心に近い研究会になっているといえよう。

研究内容としては、「公共圏とコミュニケーション」の問題を具体的に検討するため、特定の地域、あるいは特定の政策領域について、担い手となる市民やさまざまな組織・グループ間のコミュニケーションに顕著な学ぶべき特徴のある事例を選んで研究対象とすることにした。いくつかの事例を分担調査^{めいとうさつ}して比較検討した結果、滋賀県東近江市(旧愛東町)から全国に広まった、菜の花を介しての食と農とエネルギーの循環コミュニティづくり運動である「菜の花プロジェクトネットワーク」(<http://www.nanohana.gr.jp> 2006年10月7日閲覧)を事例として取り上げることにした。

「菜の花プロジェクトネットワーク」を事例として採り上げるに際して、現地調査として2006

年8月26日に滋賀県東近江市(旧愛東町)で開催された「第3回 全国菜の花学会・楽会 in 東近江」に参加した。この学会には、全国から菜の花プロジェクトの実践者・研究者が集まり、特に、プロジェクト関係者が「未来世代」と呼ぶ、高校生から大学生・大学院生にかけての若手の実践者からの報告が多数なされていた。また、菜の花プロジェクトをめくり、文系・理系など分野の別を越えた人的・組織的なつながりのあることが可視的に分かり、専門家だけではなく地域の市民を巻き込んだ運動であることを把握することができた。

むすびにかえて

今年度の「公共茶論」では、この調査に加え、文献研究や関係者への追加調査なども交え、「菜の花プロジェクト」における具体的な地域実践、あるいは全国への運動の広がりの中での「コミュニケーション」のあり方を分析し、今後の具体的な市民参加の地域づくり、政策実践の中での「コミュニケーション」のあるべき姿を何らかの形で提示していきたいと考えている。また、昨年度と同様に、研究会の成果を何らかの形で公の場で発表できるよう、引き続き努力していきたい。